

斜里地方に生息する両生爬虫類相調査報告

佐藤孝則¹・宇仁義和²・増田 泰²

1. 632-8510 奈良県天理市杣之内町1050番地,天理大学 2. 099-4113 北海道斜里郡斜里町本町49番地知床博物館

Reptlia and Amphibia Fauna of Shari, Hokkaido.

SATO Takanori, UNI Yoshikazu & MASUDA Yasushi

1. Tenri University, 1050Sennouchicho, Tenri, Nara, 632-8510, Japan 2. Shiretoko Museum, 49Honmachi, Shari, Hokkaido, 099-4113, Japan

1.はじめに

知床半島に生息する両生爬虫類に関する調査研究は少ないが、それでも少しずつ概要が明らかになってきた(大石 1961; 太田・中川 1985; 佐藤 1996a; 佐藤・中林 1997)。なかでも、オホーツク海に面したウトロ地方海岸地域の爬虫類相については、道東内陸地域の一般的な分布状況とは異なることが、佐藤(1996a)の報告で明らかになってきた。特にニホンカナヘビよりニホントカゲが数多く観察されたり、海岸沿いでマムシが観察されることは、他の道東の海岸沿いや内陸部でもあまり例がないという。

今回の調査では知床半島基部の斜里地方を調査地として、半島部の特徴的な爬虫類相が半島基部でも認められるのかどうか、また海岸線に近い低標高湿原でエゾサンショウウオが繁殖しているかどうかなどを明らかにするため、両生爬虫類の分布状況を調査した。

2.調査地と方法

調査地は知床半島の基部に位置する斜里町市街地およびその周辺地域で、斜里岳、留辺斯岳・海別岳の山々の北側斜面からオホーツク海の海岸にいたるまでの範囲である。調査期間は1996年4月17日、21~22日、24日、25~28日、5月1日、21

日、26~28日、6月14~15日、30日、7月22~23日、27~29日の延べ21日間であった。

調査は、ガツタンコ湿原周辺域にエゾサンショウウオが生息するかどうかの確認、あるいは生息するのであれば、その個体群の繁殖状況を把握するため、夜間にヘッドランプとサーチライトを用いて卵囊の確認と繁殖個体の生け捕りをおこなった。卵囊については産み付け対象物を記録し、双数と1卵囊中の卵数を数えた。繁殖個体については生け捕って体サイズをノギスで計測し、体重は携帯用竿ばかりを用いて量った。

一方、調査地内における両生爬虫類の分布状況を把握するため、両生類については生息の可能性のある湿地域を探して、姿、鳴き声、卵で生息の有無を確認した。爬虫類については河畔のコンクリート護岸や橋、温泉地など爬虫類が日光浴しやすい場所を探して、姿、脱皮後の抜け殻などで生息の有無を確認した。捕獲した両生爬虫類はノギスや携帯用竿ばかり、デジタル式温度計を用いて、体サイズ、体重、体温(爬虫類の直腸部)、水温(両生類の繁殖地の温度)などを計った。

3.斜里地方産両生爬虫類目録

今回の調査で確認した当該調査地における両生類および爬虫類は、以下に示す4科5種であった。

両生類 AMPHIBIA

サンショウウオ目Caudata

サンショウウオ科Hynobiidae

エゾサンショウウオ *Hynobius retardatus*

カエル目Salientia

アカガエル科Ranidae

エゾアカガエル *Rana pirica*

アマガエル科Hylidae

ニホンアマガエル *Hyla japonica*

爬虫類 REPTILIA

トカゲ目Squamata

ヘビ科Colubridae

シマヘビ *Elaphe quadrivirgata*

ジムグリ *Elaphe conspiciolata*

なお今回の調査後、2000年6月20日、調査地内の斜里町越川地区国道244号線越川橋で、交通事故によって死亡したアオダイショウ (*Elaphe climacophora*) が知床博物館に届けられている。

4. 各論

(1) ガッタンコ湿原周辺のエゾサンショウウオ

斜里町市街地の東に位置するガッタンコ湿原で、エゾサンショウウオの繁殖活動のようすを確認することができた。以下にその結果を示す。

1) 卵囊確認場所

卵囊を確認したのは、ヤチダモやハンノキなどが優占するハンノキ・ヤチダモ林で、林床にはトクサやヨブスマソウなどの草本が生育していた。林内には雪解け水などでできた長径80m、短径20mの楕円形の池があり、この中でエゾサンショウウオの卵囊を確認した。この池の水深は約20cm、水温の平均は水底が8.5℃で水面下は9.9℃、pHは5.0であった。この林は標高約8mのところに位置し、「以久科原生花園」西端のキタヨシが生育する低層湿原に隣接している。エゾサンショウウオの繁殖地としては、これまで知られているもっとも低標高とされる十勝管内大樹町楽古川河口の標高10mの繁殖地に匹敵する (Sato 1990)。このように、ガッタンコ湿原周辺域の個体群は、もっとも低標高で繁殖する個体群として位置づけられる。また両生類は海域では繁殖できないこと

を考慮すると、エゾサンショウウオにとってこのハンノキ・ヤチダモ林は、海面が今より4~5m以上上昇したとされる約6000年前の縄文海進の時でも、貴重な低標高繁殖地の一つだったと思われる。

2) 卵囊産みつけ日

ガッタンコ湿原周辺域で確認した卵囊産みつけ日と卵囊双数は、次に示すとおりである。4月21日に2双、24日に2双、25日に28双、26日に19双、27日に5双で、7日間で延べ56双の卵囊が産みつけられていた。最終的には5月1日83双の卵囊を確認した。おそらく4月25日が卵囊産みつけ日のピークであったと思われる。

このように4月下旬に産卵のピークがあるのは、日高山麓で繁殖する個体群と同じであり (Sato 1989)、平地で繁殖する個体群としては一般的だと思われる。

3) 卵囊産みつけ対象物

4月26日の午前中の調査で、25日夜間に当該調査地で産みつけられた卵囊は、上述したように28双であることが確かめられた。そこで、これら卵囊に含まれる卵数、死卵数、その時の卵囊産みつけ水深について、産みつけ対象物ごとに表1に示す。この表からわかるように、4月21日から25日までに産みつけられた卵囊32双は、スゲの枯れ葉に14双、トクサの茎に10双、ヨブスマソウの枯れ茎に6双、ハンノキの枯れ枝に2双が産みつけられていた。これらの植物は全て当該調査地の林地に生育する植物で、トクサのように生きているものやスゲの枯れ葉、ヨブスマソウの枯れ茎、ハンノキの枯れ枝など、すべて水中に存在するものばかりだった。

4) 卵数および死卵出現率

表1をさらに分析すると、卵囊1双に含まれる卵数でもっとも多かったのはヨブスマソウの枯れ茎に産みつけられていた平均卵数126.8個で、次いで多かったのはスゲの枯れ葉の115.1個、そしてトクサの105.9個、ハンノキの枯れ枝の104.5個の順であった。また、卵囊産みつけ位置の平均水深を深い順にみると、ヨブスマソウの枯れ茎に産みつけられていた平均水深28.3cmで、次いでス

表1. ガッタンコ湿原周辺域で4月25日に産卵したエゾサンショウウオの1卵囊双数あたりの卵数と産みつけられていた卵囊の水面からの深さ。ただし、卵数横の丸数字はその中に含まれる死卵の数を示し、水深の単位はミリメートル。

	スゲの葉		トクサの葉		ヨブスマソウの枯れ茎		ハンノキの枯れ枝	
	卵数	水深	卵数	水深	卵数	水深	卵数	水深
1	(56①+58)	0	(54①+53)	5	(60①+75)	60	(53+54)	0
2	(54①+60)	5	(50②+41)	15	(58④+58③)	15	(50+52)	20
3	(66⑤+53)	10	(67①+57①)	10	(41②+44)	55		
4	(60③+49)	20	(68+49)	5	(33②+51)	20		
5	(69+58)	0	(35+33)	0	(70+59)	20		
6	(75+61)	25	(70+60)	40	(44+41)	-		
7	(66+54)	25	(66+61)	30				
8	(78+71)	0	(62+57)	-				
9	(51+42)	0	(36+29)	-				
10	(57+56)	10	(64+47)	-				
11	(40+40)	0						
12	(58+57)	25						
13	(61+61)	30						
14	(51+50)	40						

表2. ガッタンコ湿原周辺域の繁殖地で捕獲したエゾサンショウウオの外部計測値。ただし、長さの単位はミリメートル、体重はグラムを示す。

	性別	齢段階	全長	頭胴長	尾長	頭幅	胴幅	尾高	体重	備考
1	♀	成体	139.0	63.1	75.9	12.3	16.3	7.8	11.1	産卵前
2	♀	成体	154.8	69.8	85.0	12.2	19.5	7.8	13.0	産卵前
3	♂	成体	139.2+	61.2	78.0+	16.3	17.0	10.8	11.4	二次性徴が顕著
4	♂	成体	141.3+	64.3	77.0+	17.0	19.4	14.1	13.3	二次性徴が顕著
5	♀	成体	140.0	65.5	74.5	12.0	14.6	9.6	7.6	産卵後

ゲの枯れ葉の15.0cm、そしてトクサの13.6cm、ハンノキの枯れ枝の10.0cmの順であった。これら4種の植物間における卵数、産みつけ水深に有意な差があるかどうか統計分析するには資料数が不足している。ヨブスマソウの枯れ茎は池の水底に横たわっていることが多いことから、エゾサンショウウオがそこに卵囊を産みつけるためには水底で産みつけるしかない。その結果、ヨブスマソウの枯れ枝に産みつけられた卵囊は水深がもっとも深くなったと考えられる。いずれにおいても、資料数を多くしてより詳細に分析することが必要である。

4月25日までに確認した卵囊32双のうち、未受精を含む死卵を有した卵囊は11双で、全体の39.3%を占めた。しかし、卵囊1双あたりに含まれる死卵の出現率は平均で見ると2.27%であり、

この割合は自然の個体群ではふつうに見られることから、当該調査地の繁殖個体群には雄の個体数の減少といった雌雄のアンバランスはほとんどないと思われる。ただ、当該調査地が現在の個体群にとって安泰かどうかは、生息地そのものを更に解析する必要がある。

5) 繁殖個体の外部形態

ガッタンコ湿原周辺域の繁殖地で生け捕ったエゾサンショウウオの外部計測値を表2に示す。この表の番号1と2の雌は4月26日に、番号3～5の雌雄は27日に生け捕った個体である。雄2個体と雌3個体の少ない資料数であることから、雌雄間の体長の比較は難しい。ただ、体長の比較基準としてよく利用される頭胴長をみると、雄2個体の平均値と雌3個体の平均値は、前者は62.8mm、

後者は66.1mmで雌のほうが大きい傾向にあった。しかしこの比較も資料数を多くして分析する必要がある。番号5の産卵後の雌は、番号1と2の産卵前の雌に比べて頭幅に対する洞幅は狭く、また体重は相対的に軽くなっている。これは、卵を体内に持っているかないかの差である。

(2) 両生類の生息状況

当該調査地内における両生類の確認地点を図1に

示す。今回の調査では両生類3種（エゾサンショウウオ、エゾアカガエル、ニホンアマガエル）を確認した。以下ではそれぞれの種ごとについてまとめ、考察する。

1) エゾサンショウウオ

エゾサンショウウオの生息確認を示すデータを表3に示す。この表と図1から明らかなように、本種を確認した場所は、オホーツク海に近接したガッタンコ湿原周辺の林（標高8m）のほかはす

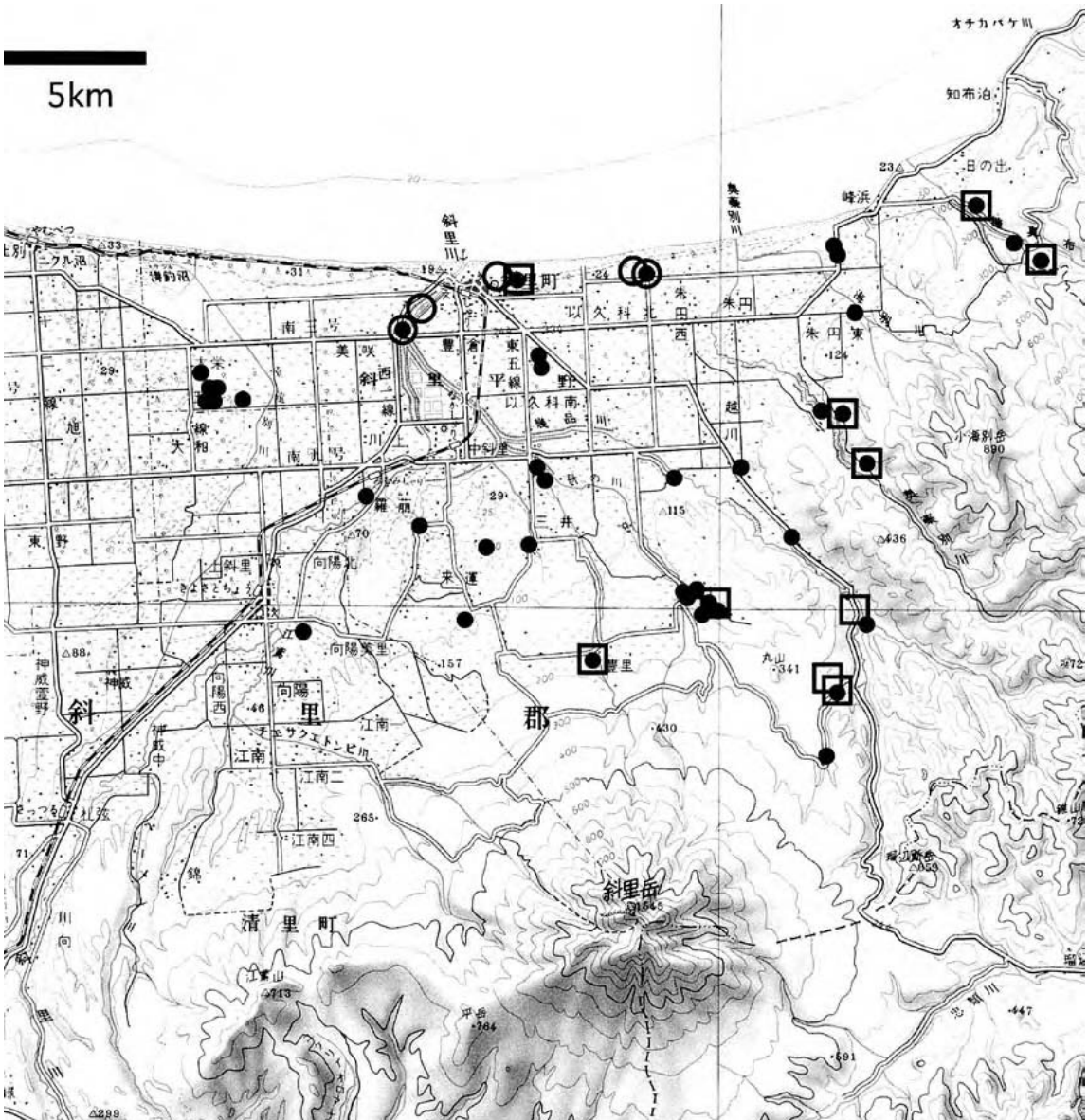


図1. 斜里地方における両生類3種の確認地域。□エゾサンショウウオ ●エゾアカガエル ○ニホンアマガエル

表3. エゾサンショウウオの生息確認記録. ただし, 水温は水底と水面下の温度の平均を示し, 標高の単位はメートル, 水深はセンチメートル, 水温・気温は摂氏(℃)を示す.

	確認方法	確認場所	標高	形状	水深	水温	気温	pH
4.26	卵囊(32双)・成体	ガッタンコ湿原に隣接する林	8	池	20	9.2	14.6	5.0
5.27	卵囊(16双)	旧豊里小学校の校庭	190	人工池	22	9.9	9.0	6.9
5.28	卵囊(7双)	秋の川沿いの林道脇	130	水たまり	4	26.1	19.8	6.8
5.28	卵囊(34双)	シュンクンベツ川沿いの林道脇	200	水たまり	9	13.0	18.9	6.1
5.28	卵囊(1双)	シュンクンベツ川沿いの林道脇	210	水たまり	5	6.6	22.1	6.4
5.28	卵囊(16双)・幼生	奥薬別川沿いの林道脇	100	水たまり	30	12.1	17.1	6.9
5.28	卵囊(3双以上)	奥薬別川沿いの林道脇	130	水たまり	12	15.4	17.4	6.2
6.14	卵囊(7双)	日の出地区廃屋付近	170	水たまり	-	-	-	-
6.30	卵囊(3双)	幾品川沿い越川橋下	130	水たまり	-	-	-	-
7.27	卵囊(孵化後)	幾品川上流の斜里岳林道脇	530	水たまり	9	21.0	22.2	6.6
7.28	幼生	日の出地区ヌカマップ池	250	池	18	17.2	22.1	6.9

べて山地あるいは山麓に位置している(標高100~200m). 日の出地区廃屋付近の繁殖地は直線距離で見るとオホーツク海に近いが, 標高170mの位置にある. このことから, 市街地に近くしかもオホーツク海に近接したガッタンコ湿原周辺の繁殖地は, 当該調査地ではもっとも貴重な場所といえる. エゾサンショウウオは北海道固有種であることから(佐藤 1996b), この貴重さは, 道内レベルにおいても, すなわち種レベルにおいてもかわることはない.

2) エゾアカガエル

エゾアカガエルの生息確認を示すデータを表4に示す. この表と図1から明らかなように, 標高3mの斜里川左岸河川敷に広がる小湿地から標高530mの幾品川上流「斜里岳林道」脇に至るまで, 広範囲にわたって本種の痕跡を確認することができた. 痕跡のうち, 4月17日から5月28日までの期間は主に卵塊の存在によって, またそれを補足するように鳴き声や成体の目視によっても確認した.

本種は雪解け水が貯まってできた水たまりで繁殖することが多く, そのため孵化した幼生は変態するまで成長せずに死ぬこともあるが, 本調査地では今回それを確認できなかった. しかし繁殖地へ向かう途中に国道334号線上で轢死した成体を峰浜地区で確認した. 本種の生息状況をみると, 概して道東の内陸地域でふつうに見られる生息状況とほとんど変わらないと判断される.

表5にエゾアカガエルの外部計測値を示す. この表は主に富士地区秋の川流域で繁殖する本種の個体群を無作為に生け捕り, 外部形態を計測して得られたデータをまとめたものである. 雄19個体の平均値を見ると, 頭胴長は 55.6 ± 0.15 mm, 脛長は 29.4 ± 1.07 mmであった. 雌雄間を比べると, 脛長では全く有意差はなかったが, 頭胴長では明らかに雌のほうが大きいという結果であった($p < 0.001$). この傾向はエゾアカガエルの一般的傾向と思われるが, 両者とも比較分析するための資料数が不足していることから, 今後も補足的にデータを収集する必要がある. 特に, ペア同士の雌雄間に関する分析も必要である. おそらく現段階では, 当該調査地内では地域個体群間には外部形態による雌雄差はみとめられないと思われるが, この点も検討課題である. また, 20, 21, 22番のペアリングしていた雌の体重は雄よりも有意に重い($p < 0.001$). これは雌3個体とも産卵前で, 体内に卵をををもっていったからであろう. これは非産卵期に生け捕った27番の雌の体重が, 3個体の雌それぞれの体重よりも軽いことが類推できる.

3) ニホンアマガエル

ニホンアマガエルの生息確認を示すデータを表6に示す. この表と図1から明らかなように, 本種を確認したのは4地域で, 河口に近い斜里川左岸の河川敷の小湿地2地域と, 町道南1号道路の第1号橋北側に広がる「以久科原生花園」の一面

表4. エゾアカガエルの生息確認場所.

確認日	確認方法						確認場所	標高(m)
	卵塊	鳴き声	成体	亜成体	幼体	幼生		
4.17	○		○				斜里川左岸河川敷の小湿地	3
4.22			○				旧以久科苗圃①の排水路	8
4.22	○		○				猿間川平和橋下の小湿地	15
4.22	○		○				大栄地区農業排水路	8
4.22	○		○				大栄地区小湿地①	15
4.22	○		○				大栄地区小湿地②	15
4.26	○	○	○				富士地区①・神社下の小湿地	140
4.26		○	○				富士地区②・秋の川沿い小湿地	140
4.26	○	○					富士地区③・林道脇の小湿地	130
4.26	○	○					富士地区④・秋の川沿いの小湿地	130
4.26	○	○	○				富士地区⑤・秋の川沿いの小湿地	140
4.27	○	○	○				富士地区⑥・神社手前の小湿地	120
4.27			○				峰浜地区国道334号線上(交通事故死)	5
4.27			○				幌泊地区14線三叉路の廃屋	170
4.27	○		○				奥薬別川河畔①水たまり	70
4.27	○	○	○				奥薬別川河畔①小湿地	130
4.27	○		○				大栄地区小湿地③・南北防風林	10
4.27	○						大栄地区小湿地④・尿処理場	20
4.27	○				○		大栄地区小湿地⑤・5号北側	15
4.27	○						フカバ川源流域の水源地	80
4.27	○						越川地区幾品川左岸の水たまり	60
4.28	○						以久科苗圃②の林道沿い	8
4.28	○						東5線秋の川橋南西の小湿地	10
4.28	○						豊里川左岸の小湿地	10
4.28	○						三井地区水無川右岸13号橋下	35
4.28	○						ペケレイ川右岸左また13号橋下	40
4.28	○						羅筋地区斜里川右岸三日月湖	10
5.1	○						越川地区国道244号線東側ヤチダモ林	100
5.1	○	○					峰浜地区国道334号線西側小湿地	5
5.1	○						朱円東地区海別川左岸小湿地	70
5.1	○						ガッタコ湿原に隣接する林	8
5.27	○		○				旧豊里小学校校庭の人工池	190
5.28	○				○		秋の川沿いの林道脇の水たまり	130
5.28	○		○				越川小学校校庭の人工池	70
5.28	○				○		シュンクンベツ川沿いの水たまり	200
5.28	○						越川温泉下河畔の水たまり	130
5.28			○		○		南1号第1号橋北側の人工池	4
5.28	○						奥薬別川沿い林道脇の水たまり	100
6.15			○				日の出地区ヌカマップ池	250
7.27					○		シュンクンベツ川沿い水たまり	280
7.27					○		幾品川上流の斜里岳林道脇の水たまり	530
7.27					○		ヌカマップ川1号砂防ダム横の水たまり	140
7.28					○		日の出地区ヌカマップ池	250

表5. エゾアカガエルの外部計測値. 頭胴長と後脛長の単位はミリメートル, 体重はグラムの値を示す.

	生捕日	性別		段階		頭胴長	脛長	体重	生捕地
		♂	♀	成体	亜成体				
1	4.26	○		○		62.2	28.7	17.9	富士地区・神社下の小湿地
2	4.26	○		○		55.5	27.1	14.5	富士地区・神社下の小湿地
3	4.26	○		○		56.7	29.1	15.3	富士地区・神社下の小湿地
4	4.26	○		○		52.2	26.6	12.5	富士地区・神社下の小湿地
5	4.26	○		○		54.4	27.7	13.4	富士地区・神社下の小湿地
6	4.26	○		○		57.9	27.7	13.4	富士地区・神社下の小湿地
7	4.26	○		○		50.5	26.0	10.4	富士地区・神社下の小湿地
8	4.26	○		○		57.1	28.2	17.3	富士地区・神社下の小湿地
9	4.26	○		○		50.0	26.8	11.1	富士地区・神社下の小湿地
10	4.26	○		○		56.1	30.1	16.1	富士地区・神社下の小湿地
11	4.26	○		○		58.8	28.5	18.0	富士地区・神社下の小湿地
12	4.26	○		○		58.2	29.1	20.4	富士地区・神社下の小湿地
13	4.26	○		○		53.8	26.5	13.5	富士地区・神社下の小湿地
14	4.26	○		○		57.4	26.5	19.6	富士地区・神社下の小湿地
15	4.26	○		○		56.4	27.9	15.6	富士地区・神社下の小湿地
16	4.26	○		○		50.0	27.2	10.9	富士地区・神社下の小湿地
17	4.26	○		○		57.2	28.1	14.9	富士地区・神社下の小湿地
18	4.26	○		○		55.7	27.0	14.8	富士地区・神社下の小湿地
19	4.26	○		○		56.8	28.8	14.7	富士地区・神社下の小湿地
20	4.26		○	○	(17番とペア)	66.0	27.5	28.7	富士地区・神社下の小湿地
21	4.26		○	○	(18番とペア)	65.8	31.2	28.8	富士地区・神社下の小湿地
22	4.26		○	○	(19番とペア)	65.5	29.5	30.5	富士地区・神社下の小湿地
23	4.27	○		○		53.9	27.0	13.4	奥薬別川河畔の水たまり
24	4.27	○		○		54.6	27.9	15.6	奥薬別川河畔の水たまり
25	5.28		○	○		67.9	31.2	21.0	南1号第1号橋北側人工池
26	7.28	○		○		51.1	26.8	15.2	越川国道244号線東側ヤチダモ林
27	7.28		○	○		63.3	29.4	21.0	越川国道244号線東側ヤチダモ林

と隣接する人工池, 知床博物館北側の小湿地で, 鳴き声や姿をもって確認した. 河川敷はそれぞれ標高3mに位置する小さな湿地で, 原生花園は標高4mに位置し, 南1号道路の第1号橋北側に広がるガマやスゲ等が生育する湿地と, 川を挟んだ南東側に造られた人工池(15×30m・水深20cm)を含む地域である. そして博物館北側の湿地は標高数mに位置する湿地域で, 小さな池と水たまりでできた地域である. この4地域とも海岸に近い低標高の繁殖地にある. 知床半島の国立公園内では「知床五湖」(標高約240m)と「羅臼湖周辺」(標高約740m)の2地域で本種の生息は確認されている(佐藤・中林 1997). 今回の調査では高標高の地域では確認できなかった. 例えば, エゾアカガエルの繁殖が確認された峰浜地区の池(標高

250m)は, ニホンアマガエルにとっても比較的繁殖しやすい環境と考えられるが, 生息はまだ確かめられていない. いずれにおいても, さらに調査が進めば今回の調査地内でも本種の生息を確認できると思われる.

南1号道路第1号橋北側の湿地や人工池でニホンアマガエルを生け捕り, 頭胴長と脛長, 体重を調べた. その結果を表6に示す. 1~9番までは亜成体で, 10~20番までは成体である. 成体はすべて人工池から採集した個体で(表6), そのうちの雄10個体の平均で見ると, 頭胴長は 36.7 ± 0.75 mm, 脛長は 14.9 ± 0.20 mm, 体重は 3.8 ± 0.28 gであった. 雌は1個体分しかデータがないため, 雄との比較は困難であるが, 体重は雄よりも重いように思われる. いずれにおいても, さらにデー

表6. ニホンアマガエルの外部計測値。ただし頭胴長と後脛長の単位はミリメートル、体重はグラムの値を示す。

生捕日	性別		段階		頭胴長	脛長	体重	生捕地
	♂	♀	成体	亜成体				
1	5.28			○	20.1	8.3	0.7	南1号第1号橋北側湿地
2	5.28			○	21.4	8.2	0.6	南1号第1号橋北側湿地
3	5.28			○	20.1	8.2	0.5	南1号第1号橋北側人工池
4	5.28			○	20.5	7.8	0.4	南1号第1号橋北側人工池
5	5.28			○	20.7	7.7	0.5	南1号第1号橋北側人工池
6	5.28			○	17.4	6.2	0.3	南1号第1号橋北側人工池
7	5.28			○	17.2	6.7	0.3	南1号第1号橋北側人工池
8	5.28			○	18.1	7.1	0.4	南1号第1号橋北側人工池
9	5.28			○	15.7	6.3	0.3	南1号第1号橋北側人工池
10	5.28	○		○	36.5	14.5	3.6	南1号第1号橋北側人工池
11	5.28	○		○	34.6	15.7	4.5	南1号第1号橋北側人工池
12	5.28	○		○	33.8	14.2	3.6	南1号第1号橋北側人工池
13	5.28	○		○	37.5	15.1	4.2	南1号第1号橋北側人工池
14	5.28	○		○	39.7	15.6	2.9	南1号第1号橋北側人工池
15	5.28	○		○	36.2	14.7	4.8	南1号第1号橋北側人工池
16	5.28	○		○	35.2	14	3.2	南1号第1号橋北側人工池
17	5.28	○		○	39.8	15	4.4	南1号第1号橋北側人工池
18	5.28	○		○	34.1	14.5	2.1	南1号第1号橋北側人工池
19	5.28	○		○	39.7	15.8	4.6	南1号第1号橋北側人工池
20	5.28		○	○	39.9	16.4	5.7	南1号第1号橋北側人工池

タを加えて分析する必要がある。

(3) 爬虫類の生息状況

当該調査地内における爬虫類の確認地点を図2に、そして生け捕り個体の外部計測値を表7に示す。今回の調査では爬虫類2種（シマヘビ、ジムグリ）を確認した。以下ではそれぞれの種ごとについてまとめ、考察する。

1) シマヘビ

5月28日に南1号道路の第1号橋付近で典型的な体色を呈した3個体を生け捕り、7月23日には幾品川上流の国道244号線上に架けられた岩魚橋の欄干の下で黒化型を目視確認し、同28日には越川温泉で脱皮後の抜け殻を確認した。生け捕った3個体はそれぞれ道路上あるいは小川のコンクリート法面などで直射日光を浴びていた。地表面の温度は気温よりもわずかに高い程度で、捕獲後すぐにデジタル式温度計のセンサーを直腸に挿入して計ったところ、体温のほうが高い値を示した（表7）。このように、体温が気温や地表温よりも高いのは知床国立公園内で調査した際の結果と類似する（佐藤・中林 1997）。今回の調査で生け

捕った雄の頭胴長（全長－尾長）は、知床半島の知床林道（佐藤 1996a）やブユニ岬（佐藤・中林 1997）で生け捕った雄の個体とほぼ同じ80cmの大きさであった。この大きさは、佐藤（1993）が十勝管内の内陸部で生け捕った本種の雄4個体の平均値100cmに比べて、少し小さい傾向を示している。それぞれの分析資料数が少ないことから明確な結論は導き出せないが、今後はオホーツク海沿岸域の本種の特性を出すためにもこの点について十分に調べる必要がある。

幾品川上流の岩魚橋欄干下で黒化型を確認したが、これは知床国立公園内でもふつうに観察できることから（佐藤 1993）、少なくとも道東域においては本種の黒化型の出現は珍しくないと考えられる。

2) ジムグリ

知布泊地区のオライネコタン川に沿って走る道の道路脇（標高40m）で本種を発見した。ここで捕獲した個体は、本種の典型的な体色を呈する個



図2. 斜里地方における爬虫類2種の確認地域. ▲シマヘビ ●ジムグリ

表7. ヘビ類を捕獲した時の温度とその個体の外部計測値. ただし、温度は摂氏(℃)、長さはセンチメートルを示す.

確認日	確認方法	種類	性別	全長	尾長	体温	気温	地表温	確認地点
5.28	生捕り	シマヘビ	♂	100.0	19.7	28.9	18.9	21.9	南1号第1号橋付近の道沿い
5.28	生捕り	シマヘビ	♀	71.5+	3.5+	28.7	19.2	23	南1号第1号橋付近の道沿い
5.28	生捕り	シマヘビ	♂	98.5	21.0	27.6	19.9	20.5	南1号第1号橋付近の道沿い
7.23	目視	シマヘビ(黒化型)	-	-	-	-	-	-	国道244号線幾品川上流岩魚橋
7.28	抜け殻	シマヘビ①(頸部体鱗数は20)	-	-	-	-	-	-	越川温泉
7.28	抜け殻	シマヘビ②(頸部体鱗数は20)	-	-	-	-	-	-	越川温泉
7.28	生捕り	ジムグリ	♂	66.0	13.0	29.5	23.3	28.9	知布泊

体であった。佐藤（1996a）は以前に岩尾別温泉へ向かう道路沿い（イワウベツ川沿い）でアカジムグリに似た色彩のジムグリを生け捕った。この個体は、木場（1932）や太田・中川（1985）が確認したジムグリの色彩変異個体とほぼ同じものと思われるが、今回の調査では、この色彩をもつ個体は確認できなかった。

5. 引用文献

- 大石実.1961.知床半島の動物.帯広畜産大学知床半島学術調査団編,知床半島学術調査団報告第1報:109-113.
- 太田英利・中川 元.1985.北海道東部の爬虫類－知床博物館のコレクションから－.知床博物館研究報告7:1-6.
- 木場 一夫.1932.アカジムグリ (*Elaphe japonica* Maki) 北海道に分布す.動物学雑誌44:486-488.
- 佐藤孝則.1993.十勝の爬虫・両生類.北海道の自然と生物7:39-52.
- 佐藤孝則.1996a.知床国立公園及びその周辺に生息する爬虫類の生息状況調査.自然トピア知床管理財団平成6年度（1994年度）活動報告書,pp.51-62.
- 佐藤孝則.1996b.エゾサンショウウオ.日本動物大百科/両生類・爬虫類・軟骨魚類、12-13.
- 佐藤孝則・中林成広.1997.知床国立公園内に生息する両生爬虫類.平成7年度（1985年度）自然トピア知床管理財団活動報告書,pp.40-49.
- Sato T. 1989.Breeding environment and spawning of a salamander, *Hynobius retardatus*, at the foot of Hidaka Mountains, Hokkaido. In: Matsui M., Hikida T. & R.C. Goris (eds) ,Current Herpetol. in East Asia. 292-304. Herpetol. Soc. Jpn., Kyoto.
- Sato T. 1990. Temperature and velocity of water at breeding sites of *Hynobius retardatus*. Jpn. J. Herpetol. 13:131-135.